



Japan Region

International Training in Communication

Volume 28

June
2010 3

目次

Table of Contents

Vol.28 No.3

June 2010

1	今期のテーマ	2009-2010 Themes
2	日本リージョン会長メッセージ	The President's Message
3	第28回ITC日本リージョン年次大会報告	Reports of the 28th Japan Region Annual Conference
5	会則修正案・決議案審議結果	Amendments to the Bylaws
6	報告 ワークショップ / 評価コンテスト	Evaluation Contest
7	〃 / 即興スピーチコンテスト	Extempore Speech Contest
8	報告 教育セッション / 事実の中からチャンスを見出す	Discovering Opportunity from Facts
9	〃 / ゆたかな話し方のために	Speaking with Affluence
10	スピーチコンテスト (英語)	Speech Contest (English)
12	スピーチコンテスト (日本語)	Speech Contest (Japanese)
14	国際より	From the International
16	羅針盤 日本リージョン次期会長	Compass - Interview with the President-Elect
18	祝60周年 名古屋クラブ	The 60th Anniversary Nagoya Club
19	祝45周年 阪神クラブ	The 45th Anniversary Hanshin Club
20	追悼 第3代日本リージョン会長 菊池悦子さんを偲んで	Memories of the late Kikuchi Etsuko
21	報告 PREM活動 カウンシル No. 3 PREM委員会	Council No. 3 PREM Committee
22	〃 No. 4 安芸クラブ	Aki Club (No. 4)
23	〃 No. 5 千里クラブ	Senri Club (No. 5)
24	〃 No. 6 京都クラブ	Kyoto Club (No. 6)
25	〃 No. 7 鳥取クラブ	Tottori Club (No. 7)
26	報告 プログラム・教育 No. 1 葵クラブ	Aoi Club (No. 1)
27	〃 No. 4 ひがし広島クラブ	Higashihiroshima Club (No. 4)
28	〃 No. 7 倉吉クラブ	Kurayoshi Club (No. 7)
29	〃 No. 8 サンデークラブ	Sunday Club (No. 8)
30	特別寄稿「対話を忘れた日本人」岡部達昭	Special Contribution by Okabe Tatsuaki
32	訂正および編集者からのメッセージ	Corrections & Message from Editor
	ITC 宣誓&声明文	ITC Pledge & Mission Statement of Japan Region

ITC 日本リージョン 第28期テーマ
2009 - 2010

Japan Region Theme

実践－知識を叡智に

Practice - Knowledge into Wisdom

長期目標：組織運営の再考
会員の支援と増強

Long term: Reconsideration of the Organization Management
Support and Reinforcement of the Membership

短期目標：カウンスル＝PREM 活動の促進
クラブ＝プログラム・教育の充実

Short term: Council… Promotion of PREM activities
Club … Enrichment of Program - Education

ITC の学びはエンドレス

日本リージョン第 28 期会長 岡崎祥子



第 28 回 ITC 日本リージョン年次大会もつつがなく終了致しました。皆さま方には、山陰の遠隔地での開催にもかかわらず、たくさんご出席いただき、本当にうれしく存じました。そして会員の皆さまは充実した大会 2 日間をお過ごしいただけましたでしょうか。旧交を温め、新たな出会いに喜びを感じながら、大会テーマ「叡智をもとめて / Acquire Wisdom」は、皆さまにとって手応えがありましたでしょうか。

私は今期、リージョンの運営や大会準備に精いっぱい携わってまいりましたが、この間、沢山の学び・経験・出会いの機会を頂きました。ITC はすべてのことが学びの場であることを改めて感じた一年でした。

まさに ITC の学びはエンドレスです。そしてその学びは少しずつ形を変えながら繰り返しています。私たちの学びは、一見単純な繰り返しのように思いがちですが、決してそうではありません。例年の事務手続きや単純なスピーチでさえも、独自のアイデアや変化を取り入れる時、それはまた生まれ変わったように新たな形となって学びの対象となります。ここに ITC での学びの反復の重要性に気付かされ、またその妙をひしと感じるのです。

今後も私たちは、会員としてエンドレスに叡智を求めながら ITC と向き合っていくことでしょう。

Endless learning of ITC

28th Japan Region President: Sachiko Okazaki

The 28th Japan Region Annual Conference has finished safe and sound. I am really glad that a lot of people have attended the conference. And I would like to thank all of you for coming all the way to San-in. How did you find the two days of conference? Did you have a wonderful time? Have you warmed your old friendship? Have you got new encounters? Have you acquired something from the theme "Acquire Wisdom" ?

During this term, I have taken part in the management of the Region and also the preparation of this conference. Through these jobs, I have learned and experienced a lot. And I have been fortunate enough to have a number of chances of encounters. This has been the year when I renewed my understanding that everything about ITC is the opportunity for learning.

Surely, learning in ITC is endless. And, needless to say, we are repeating the processes of learning. Sometimes it seems that we are repeating the same thing again and again. But it is not the case. Seemingly similar and monotonous processes have, in fact, something a little different in them. Even the things like clerical jobs and simple speeches can be the subjects of learning in an unimaginable way ever, if only you put some of your original ideas and a bit of change into them. Here we find the importance of repeating and appreciate the wonders of learning.

As a member, each of us will be getting along with ITC in the endless search of wisdom from now on.

第28回 ITC 日本リージョン年次大会報告

第28回 ITC 日本リージョン年次大会は、5月25日と26日の両日、山陰の地で初めて開催されました。まさに大会テーマ「叡智を求めて / Acquire Wisdom」の如く、知的な雰囲気の中で、盛大にそして和やかにプログラムは進行していきました。すべてを網羅することはできませんが、写真や報告などで、大まかなようすをご紹介します。

<開会式>



大会会場の米子コンベンションセンター



登録・受付



開会式



開会挨拶・岡崎祥子日本リージョン会長



ビジネス・審議風景



ITC 公式訪問者 Sue Martin



会員代表挨拶・宮田誠一
(サンデー)



オープニング・奥日野源流太鼓



入場行進・大会開催を支えたカウンスル No. 7



入場行進・新たに眉山クラブがチャーターしたカウンスル No. 5

<特別講演>



脳科学者、茂木健一郎による「前向きに生きる心の持ち方」

「自分の価値見つけて」
脳科学者・茂木氏が講演

脳科学者として多方面で活躍する茂木健一郎氏の講演が25日、米子市末広町の米子コンベンションセンターであった。茂木氏は世界標準と大きくずれつつある日本の大学を例に挙げ、学問とは世界で通用するものだが、日本の大学はそれを教えない。日本の社会は



「自分にとって揺るがない価値とは何かを見つめ直す必要がある」と話す茂木健一郎氏。米子市末広町、米子コンベンションセンター

「ガラパゴス化」してしまい、世界から取り残されている」と説明した。その上で、日本が世界で生き残るには、この先どうなるかわからないという「偶発性」と向き合うことが必要だと強調。「日本人は社会から外れまいとして大学に進むが、人を履歴書で見る社会は日本の悲劇だ」と語気を強めた。

最後は混迷とした現代社会に触れ「自分にとって揺るがない価値とは何かを見つめ直す時ではないか」と結んだ。

講演は、コミュニケーション能力の向上などを目指す国際組織「ITC」の全国大会の中であり、同組織の会員や市民ら約850人が耳を傾けた。

「山陰中央新報」（5月26日付）に掲載された講演の記事

<晩餐会>



晩餐会開会（大山ロイヤルホテル）



祝辞・平井伸治鳥取県知事代理



祝辞・溝口善兵衛島根県知事



インストラリングオフィサーのSue Martin（左端）と退任する第28期日本リージョン選出役員



祝辞・野坂康夫米子市長



乾杯・盛田純子（名古屋）



第29期日本リージョン選出役員

<スピーチコンテスト>

ITC 日本リージョン
第28回スピーチコンテスト
「英語の部」

英語の部審査員



左から仲田眞一、Sue Martin、加藤啓子



英語の部 スピーカーとプログラムリーダー (左端)

ITC 日本リージョン
第28回スピーチコンテスト
「日本語の部」

日本語の部審査員



岡部達昭



高橋一清



大野三恵子



日本語の部 スピーカーとプログラムリーダー (左端)

<表彰と閉会>



継続会員表彰



第29回 ITC 日本リージョン年次大会は
2011年6月1日(水)、2日(木)
神戸ポートピアホテルにて開催される。



ゴールド達成賞
受賞者代表の
喜多邦子
(六甲)



謝辞・山本陽子
コーディネーター
(松江)



クロージングソート・
岩佐圭子(東京)

ITC 日本リージョン第28期 (2009～2010) 会則修正案及び決議案

会則・決議委員長 白垣駿一

去る5月25、26日、米子コンベンションセンターで行なわれた、第28回日本リージョン年次大会に提出された会則修正案及び決議案の審議結果を下記の通り報告します。

★会則修正案1 原案通り可決。

修正箇所：会則 9.2.10. 修正方法：置き換え（下線部が修正箇所を示す）

9.2.10. プログラム・教育：プログラム・教育委員会は

9.2.10.a. リージョン内各レベルのプログラムと教育の向上を援助する。

9.2.10.b. リージョン大会のプログラム及び教育の企画につき責任を有する。

9.2.10.c. リージョン内の ITC メンタリングプログラムを助成する。

★決議案 否決。

評価コンテスト



評価コンテスト入賞者

ワークショップBリーダー 村山紀子（岡山）

ワークショップB「評価コンテスト」は参加者の中から即席スピーカー、評価者、審査員などほとんどの役がその場で選ばれるという形式で行われました。各グループで話し合って評価を練り上げ、80分で予選→準決勝→決勝へとトーナメント式で勝ち抜いていきます。

この企画を練るにあたって「評価コンテスト」にはリージョンテーマである「実践」と「突然の役目に立ち向かう」というハードルを置きました。なぜそのようなスリリングな悪魔好みのハードルを掲げたのか。それは「評価コンテスト」という手段を使って突然の出来事への対応を学ぶためでした。皆さまも「スピーカーが出られなくなったので代ってください」など、ためらう間がない経験をなさったことがあると思います。つまり私たちは「何が起こるか分からない」という企画に情熱を注ぎました。手拔かりなく準備したつもりでしたが、悪魔はそんなに簡単には許してはくれません。

欠席者があること、開始時間の遅れがあることなどは計算済みの危機管理をしてありましたが、当日の状況は委員会の想定を超えていて、手順通りにことが運ばなかったのです。動揺を隠せない状態で見切り発車し、即席スピーチ→評価→表彰までこぎ着けた時は、参加者の皆さまの限りなく温かなご協力と、心一つにしてハードルを乗り越えようとする担当者の方々の姿にリーダーの私の胸は熱くなりました。前向きに対処するというITC教育のおかげだと思います。配布・回収した評価用紙に「即席スピーチと評価は素晴らしかった」「良い企画だった」との賞賛のコメントが書かれていたことは、企画側の大きな喜びです。即席スピーカーや評価者の方々に後日インタビューを試みました。「喉から心臓が飛び出しそうでした」と狙い通りの答えが返ってきました。

134名という多くの参加者に恵まれながら、その期待に十分応えられなかった部分があり、残念に思います。

このワークショップの後、茂木健一郎氏の「偶有性を乗り越えることが大切」という講演を聴き、この悪魔好みのハードルを乗り越えた経験はいつかきっと役に立つと思いました。このたびの反省を取り入れて、さらに企画を練り直しておきたいと思います。資料を必要な方はお申してください。

即興スピーチコンテスト



優勝した廣瀬忠子さん（阪神）



担当委員長 横山末子（六甲）

即興スピーチコンテストは、5カウンスル No. 2、3、5、7、8の会員が一堂に会し、出席者280数名、役割担当者43名動員のもと、開催されました。この即興スピーチコンテストと通常のスピーチコンテストの違いは①カテゴリーがない ②論題は3週間前ではなく、5分前に提供され、3～5分間のスピーチを作成することです。

目的の一つは、とっさのスピーチにも戸惑わない訓練です。このワークショップの準備に当たり、担当委員3名は入念な協議のもと準備態勢に入りました。

1. 即興スピーチコンテストについての全体像を網羅し、特にコンテスト、ページ（付き添い）、プログラムリーダー3者の動きを把握し、資料作成を開始。
2. 5カウンスル第一副会長に役割担当者推薦を依頼。各カウンスルより選出された精鋭が勢ぞろいする。役割担当者一覧表を作成し、即興スピーチコンテストについての資料とともに、5カウンスルに下ろす。

以上をベースに各役割担当者の任務内容資料とタイムスケジュール表の作成。担当委員は通常のスピーチコンテストとは一味違う、5カウンスルの和やかな交流の機会であることをモットーに、コンテストの緊張感が和らぐよう、また全出場者に対する目配り、気配り、心配りを常に心がけ、用紙もオリジナルなものを作成するなど、また論題に関しては、スピーチの構成が容易にできるよう考慮する。

5カウンスル第一副会長の皆さまにも委員として役割を兼務していただき、この大掛かりなワークショップの各カウンスルの窓口としてご協力を仰ぐ。5カウンスル第一副会長の皆さまによる協力委員としての位置づけは、その後の連絡事項に功を奏し速やかに運ばれる。しかし、5カウンスルの役割担当者全員が一堂に会して行うリハーサルはおおよそ至難の技であるので、可能な限りメール連絡に徹し、リージョン大会に備える。

当日の小ホールでの第1回集合時間は12時から20分間の全体ブリーフィング。担当役割者のご協力のもと速やかに了解、確認いただき終了後、開会式場へ。最終集合時間13時35分、開会式の延長で開始時間が遅れたが、着席いただきスタンバイ。会場はほとんど満席状態。いよいよ即興スピーチコンテストが展開され、全役割担当者の確実な責任感と努力が功を奏し、ITC会員の日頃培われた能力が、聴衆、出場者、役割担当者の3者が一体感となって会場にみなぎり、燃焼されました。優勝されたのは、阪神クラブの廣瀬忠子さんでした。

第28期テーマ“知識を叡智に”が実践できたことを実感致しました。終了後、異口同音にワークショップ参加の感動を頂きました。皆さまと一丸となって実施致しましたこのワークショップを、今後カウンスル、クラブでお役立ていただければ、担当委員一同この上ない幸せに存じます。

事実の中からチャンスを見出す

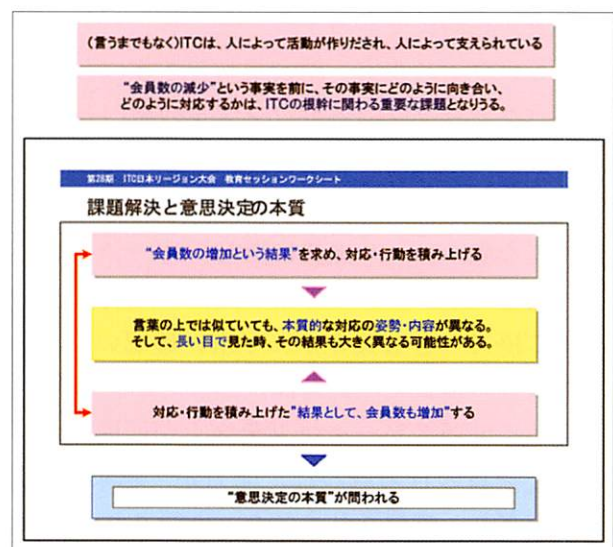
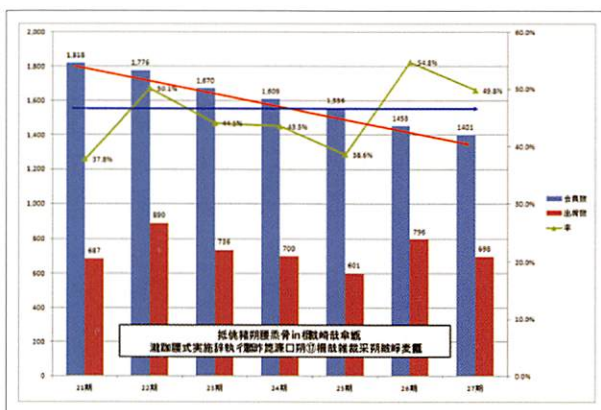
— マーケティングによる問題解決ステップとその実例 —

担当委員 石田恵子（平安）

マーケティングの基本知識とその手法の本質、つまり①事実を冷静にバランス良く積み上げて現状を理解すること ②どうしたら解決に結びつくかを考え行動に移すこと ③視点を変えてみるのが大事だということを学びました。マーケティングとは単に「物を作って売る」だけではなく、その手法を学び実行することで、身近にある問題の解決につなげていくことができるのです。そのマーケティングの手法を、今 ITC が直面している「会員減少」の問題に結びつけて話は進みました。

① ITC は確かに年々会員数が減少しているが、リージョン大会への出席人数は横ばいあるいは伸びている事実。②事実に基づき原因に迫ることが必要であり、悲観的な時は肯定的なものを見逃しやすいが、バランス良く現状を見つめることが大切。単に「会員数を増やす」という問題の裏返しでは解決策にはならない。③「入会してみたい」という期待感と、入会后「入会しよかった」という満足感、この2つが必要になる。④ ITC は中にいる会員自身が「製品」であり“会員減少”という事実に応じてどのように向き合い対応するかは、ITC の根幹にかかわる重要な課題である。故に手法以前に意思決定が大切となる。ITC の強み、弱み、願望、理念をつかんでおり、それは客観的に見て妥当か？ 何を実現しようとしているのか、自ら把握し説明できるか？ 適切な実現方法を選択実行しているか？ これらが意思決定における基本であり、これを間違えてはいけない。

最後に元レーガン大統領の演説から「棚卸しから始めよう」を引用し、厳しい状況の中でも事実の中から原因を探し棚卸しをしてからすべてを始めたら、解決できない問題はなく、ITC も同様であると締めくくられました。ITC が今、直面している問題の解決につなげていくことのできる教育でした。



意思決定における基本

自らを理解しているか？

自らの強み、弱み、願望、理念(大切にしているもの)を掴んでおり、それは客観的に見ても妥当か？

目的は明確か？

意思決定の結果として、自分は何を実現しようとしているのかを、自らきちんと把握しているか？あるいは、きちんと説明できるか？

適切な実現方法を選択・実行しているか？

「自ら」と「自らの実現したいこと」との関係において、自分は、一貫性のある適切な手段を選択し、それを実行(着手)しているか？

棚卸しからはじめよう

so, as we begin, let us take inventory.

“棚卸しからはじめよう”

President Ronald Reagan, 1981 Inaugural Address

教育セッションC

ゆたかな話し方のために ～心と体の解放～

担当委員 関 稔子 (東京・アクア千葉)

出席者はすべての肩書きを外しニックネームの名札を付けて、車座でのワークショップが始まった。導入は「じゃんけん」から。まず大声で「言葉のじゃんけん」「算数のじゃんけん」をして頭と体をほぐした後、決められた時間内で相手かまわずじゃんけんして5勝したら終わり。この時相手と自然に呼吸を合わせていることを発見！子どものように夢中になり歓声を上げ、体はもう汗ばんでいる。緊張が解け、弾けるような笑顔、ほとんど全員と交わることができて仲良しになった。

次は「見て聞く言葉」。2人向き合い口パクで、自分の星座と好きな果物を声を出さずに口の動きで伝える訓練。みんな精いっぱい口を動かして相手に伝えようと必死。聞き手も気持ちを集中して聞き、分かった時は嬉しくて、思わず手を握り合う。思いを伝えるのは言葉だけでなく、体のあらゆるパーツを総動員して、体全体からわき出るエネルギーを言葉に乗せることにより生き生きとした話し方が完成することを学んだ。

最後は「家族写真から見える人間関係」。6人一組で家族構成を考えストーリーを作り、それぞれ誰かに成りきって家族写真を撮る。三世代の仲良し一家、折り合いの悪い家族、6人姉妹etc。立ち位置や体の向き、手の置き方や視線などで、6人の関係やそれぞれの感情を表現する。また、見る者は表現されたものから人間関係や一人ひとりの心模様を感じ取る。

演劇の要素を取り入れたこれらの訓練から、コミュニケーションは情報を伝えるだけでなく、感情や気持ちを他者と分かち合い共有することを認識し、自己発見と他者理解を深める手法を学んだことは大きな収穫であった。コミュニケーションの多面性に合点！初体験のユニークな楽しいワークショップだった。

第28回 ITC 日本リージョン年次大会報告

スピーチコンテスト

年次大会のハイライトであるスピーチコンテストで、今年もまた素晴らしいスピーチを聴かせていただきました。英語・日本語の部の入賞者リストと優勝スピーチ（要約）、そして、皆さまの今後に生かしていただければと、審査員の方々から頂いたコメントも掲載します。

スピーチコンテスト・英語の部入賞者

	氏名	Subject	Title
第1位	河合康子（イースト神戸）	Partner	Live and Let Live
第2位	和田千草（筑波）	Future	Thoughts for “The Year of the Tiger”
第3位	小松利香子（クリスタル神戸）	Dream	The Priority Seat



優勝スピーチ・英語の部

Live and Let Live

Yasuko Kawai (East Kobe)

There are various kinds of partners in our society. Among those partners a life partner is the closest and the deepest one in our life.

Statistics in Japan show that one in three couples ends in divorce and one in four couples marries again. Marital life style has become diversified in modern society, I'm sure only those couples who live and let live can be successful their marital lives. I'll tell you a key to success in marriage.

Last summer, when I participated in the ITC World Convention on Alaska Cruise, I saw 8 Japanese couples on board. I really felt they seemed “As is the husband, so is the wife.” They seemed to have been married for more than 40years. Getting through many difficulties, they must have had to try to improve their relationships and attend the Convention together.

I told our 6 children who were all married about what I had seen on board and asked them to build a nice partnerships following proverbs like “a good husband makes a good wife.” and “As is a husband so is a wife”

How about ourselves? I met my partner more than 50years ago at a hospital where we were working together as a doctor and a pharmacist. Love is blind. Soon we got married.

After we got married we had six children within ten years. I had been very busy taking care of them and my father in law for many years.

On the other hand, my partner got freedom. He could do anything he wanted to do. After he opened his own clinic he was supported by many women, he looked like a king of a harem. In those days I really thought childbirth was disadvantage for a wife. And I fully awoke from blind love.

When I was around 40, I encountered my oldest daughter's English tutor who taught me English after a long absence. I could have a precious time with him until he moved on to another high school.

15 years ago, when I was around 60, my partner encountered Shinran, He started to read a lot of books related to religion and Buddhism. Finally his enthusiasm to Buddhism led him to become a priest.

Looking back at our 50 years of marriage life, I have been trying to adapt my self to the taste of the partner. But for both of us, the most important policy has been “Live and Let Live”

Through this we have been able to overcome many difficulties and survive in our marriage up to now.

And I think we can reach a stage of the proverb “A good husband makes a good wife.”

Judge Comments on the Speech Contest (English /Summary)

Lecturer in medical English at Tottori University and Yonago Iryo Centre
Shin-ichi Nakada

It gives me great pleasure for me to be present at this place at which I have the honour to be one of the judges. I am not in a position to offer you good advice, but let me offer you in brief my personal views about the results.

Honestly speaking, the contestants were so impressive that it was hard for me to decide ranking from the 7 finalists.

The points I mainly put emphasis on are their messages — not their skills or grammar.

As the great book says, “In the beginning was the Word,” and the Word is very important because it conveys messages from one person to another.

When you do have a message, communication is possible, and you understand each other. AND the mutual understanding is what the world will need.

I strongly hope you'll be continuing to emulate one another through speech training for better communication as well as for our good future. Thank you.

ITC Div.IV Vice President, Fellow of ITC, ITC Official Visitor **Sue Martin**

The following are some of the points I was looking for in judging the speeches.

Introduction - I looked for a strong introduction that gained the audience's attention right from the start. I looked to see if the subject was defined so the audience knew from the opening words what the speech was about.

Body of speech - I looked for the focus of the message and whether the major points were clearly defined and supported.

Delivery - I looked to see if the speaker was vital and enthusiastic about their subject. I looked for changes of rate and pitch to give variety to the voice and for the use of pause.

Conclusion - There were some very convincing statements summarizing the content of what was said in the speeches. I looked to see if the speech was well rounded off and with a 'punchy' conclusion.

Originality - I compliment speakers for achieving originality in the content of their speeches.

Categories - In selecting a category, speakers need to think about what they want their listeners to think or feel. Do you want to persuade, inform, inspire or entertain.

The 2010 English Speaking Contest was certainly to a very high standard and I was delighted to have the privilege of attending this superb event.

Former President of Japan Region **Keiko Kato (Kyoto Club)**

Allow me to give you a few recommendations as a judge and an audience.

1) Speakers may use simpler sentences with their own words to represent their thoughts/opinions.

2) Speakers may use their voices (pitch, rhythm, stress) and body movements to deliver their messages.

3) Speakers can measure the acceptance and feeling of the audience by their verbal and non-verbal reactions.

Thank you so much for giving me a chance to listen to those attractive speeches.

スピーチコンテスト

スピーチコンテスト・日本語の部入賞者

	指 名	論 題	題 目
第1位	牧 桂子 (岡崎)	もやもや	<small>よわい</small> 齢 70
第2位	藤井千里 (平安)	メッセージ	告白
第3位	池田美智恵 (彩玉)	要注意	聞こえますか?



優勝スピーチ・日本語の部

よわい
齢 70

牧 桂子 (岡崎)

70歳を古稀と呼ぶのは周知のことですが、この言葉の由来は、中国唐代の詩人杜甫の「曲光」という漢詩の中の一説「人生七十古来稀也」に基づいていると言われています。つまり70歳まで生きるのは稀なことであると詠んでいるのです。

女性の平均寿命が86歳を超えた現在、70歳を長寿だとは思わなくなったものの、やはり高齢者であるという感は否めません。4月の終わりに私も古稀を迎えたのですが、以前からこの70歳という響きにかなり抵抗を感じており、それでも60代と70代の間に特別の区切りがあるわけではないと、自分で自分を慰めておりました。しかし昨年の暮れに届いた愛知県公安委員会からの70歳以上を対象にした「高齢者講習通知書」に、はっきりとした区切りがあることを思い知らされたのです。高齢者の自動車運転事故の多発が社会問題化している昨今、こうした講習は不可欠であるという認識はあっても、それが自分に当てはまっているという事実におよそ実感がわかず、若さを強調する私に主人は「法には逆らえんぞ。いいかげん無駄な抵抗はやめるんだな！」と冷やかに言い放ったのです。的を射た言葉だけに反論はできず、それでも何か釈然としないもやもやしたものが心の中に渦巻いておりました。

しかし正直なところ、ここ数年来の身体や容姿の衰えは顕著で、得意だったはずの車庫入れが必ず斜めに入るようになり、地下鉄の窓ガラスに映った自分の顔にぎょっとして思わず目を背けたことなど、ひそかに心を痛めたことは数知れません。それにも増して記憶力や集中力の劣化は深刻で、新しいことを覚えようとしてもほとんど頭に残らず、財布がない、鍵がない、眼鏡がないと探し回る毎日に少々あせりを感じているこの頃なのです。やはり主人の言うように無駄な抵抗はやめて、70歳であることを素直に享受すべきではないだろうか！70歳を70歳と自覚しないところに私の悲劇があるのだから…失った若さを嘆くのではなく、まず老いを受け入れてそこで生まれる心のゆとりを楽しむのもすてきなことではないだろうか！もしかして私の中に眠っている種が、ゆとりの中でなら芽を出し花が咲くこともあるかも知れない！こんな事を考えていたら今まで、もやもやしたものが消えて心がすっと軽くなっていくのを感じたのです。

人は長く生きた分、たくさんの経験によって蓄積された豊かな想像力が見聞きするもの、すべてに彩りを与え、若い日には味わえなかった幸せを得られるようになるもの、顔にしわが増えた分、心の中にもたくさんのひだができる味わい深い人生になるのだとある本で読み今更ながら年を経ることの楽しさ、年を重ねたからこそ見えるものがあることに気づかされ、胸がじんと熱くなるのを覚えました。そして何歳になっても自分を諦めないことの大切さを知ったのです。

齢70、重ねてきた時間を味方につけて自分らしく、背筋をしゃんと伸ばした人生を送りたい！心からそう思いました。

審査員コメント（日本語の部／要約）

日本語センター専門委員 元 NHK アナウンサー 岡部達昭

さすがにレベルがそろった最終審査でした。スピーチでは、まず何を言いたいのかがはっきりしていること、聴き手が共感でるかどうかが、この二つが内容を定める基本です。話し方で大事なことは、文字の音声化になっていないかどうかです。天野祐吉さんが次のようなことをおっしゃっています。「人の心を打つのは、書かれた言葉ではなく、語った言葉だ」と。ところが多くのスピーチは、語っているようでも、実は頭で覚えた書かれた文字を読んでいるのです。やはり文字の音声化なのです。文字の音声化はどうしても不自然になります。文字ではなく話す内容をイメージし、そのイメージを声の言葉にした時に自然に伝わります。つまり、「普通に話す」ことです。順位を分けたのはその辺でしょうか。かつてアナウンサー仲間、スピーチで大事なことを3点挙げ合ったことがあります。①、②は全員同じでした。①短い②具体的、そして③に私は「思いを素直に語ること」を挙げました。スピーチポイント3点、ご参考までに。

松江観光協会観光文化プロデューサー 前 文藝春秋編集局長 高橋一清

「光る言葉」を求めてスピーチを伺いました。体験を通じたその人だけの言葉や表現を持ってもらえるか、オリジナリティを大事にスピーチの中に込めてもらえるかどうかをうかがいながら審査に当たりました。いま一つは、最後の一語まで心を込めて語り、伝えてもらえるかどうか。耳を澄ましてお聴きしました。

昨夜のテノール歌手・経種廉彦さんのコンサートで、1曲目の終わりには全体から拍手がわき、から、2曲目の終わりは、会場の後ろの方から拍手がわいて、前の方の拍手は少し遅れました。経種さんは最後の最後まで気を入れて歌っておられたのです。さすがプロです。皆さんのふくよかな胸に音が吸い取られ、会場全体にピアニッシモが伝わっていかないことを敏感に感じ取り、3曲目からは最後の部分を一層念入りに歌っておられたように思います。耳にし、目にした経験を生かしたいものです。私は最後の一言まで丁寧に心を込めてお話ししようと自分に言い聞かせたのでした。

前リージョン会長 大野三恵子（京都）

すべてのスピーカーが与えられた時間を十分に使い切り、またスピーチの中で、お一人ひとりの大切な人生の一コマを伝えられたことを素晴らしく感じました。自分の考えを話す、そしてそれをどう聴き取るか。スピーチはコミュニケーションの原点だと思うのです。もし、スピーチコンテストをやめようと思っていられらるクラブがありましたら、やめる理由を考えないで、できる方法を考えて進んでほしいと思います。与えられた論題をどの角度から解釈し、自分の話とどう合わせていくか。題目をつけてどのように膨らませていくか。スピーカーが一番言いたかったことが、聴衆に正しく伝わったかどうか。私はそれらを重視して審査をさせていただきました。

International Training Weekend 2010 ワークショップ計画

現在までに決定したリーダーとそれらのタイトル

コーディネーター 泉 和子
プログラム委員長 小菅あけみ

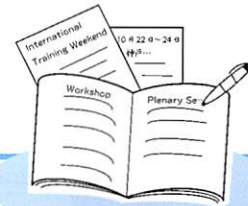
2010年10月22日（金）から24日（日）まで神戸ポートピアホテルにおいて開催されるInternational Training Weekendには、15種ほどのワークショップの実施を計画しています。5月末現在、下記の13種の計画を立てました。まだ今後追加され、変更されますが、どのようなプログラムが展開されるのかを少しでも早く皆さまのお目に入れた方が良く考え、中間報告の形で、ここに、概略をお知らせ致します。また、これらが、何時の時間帯に組み込まれるかは、まだ決定しておりません。

Workshops

ワークショップ

1. Wyn Bowler - Everyone has a story to tell (コロンビア リージョン)
ウイン ボウラー - 誰でもできるストーリーテリング
2. Carol Preiss - The unexpected and how to deal with it (ノースイーストリージョン)
キャロル プレイス - まさかのときの対処法
3. Sue Martin - Marketing / Website (ニュージーランドリージョン)
スー マーティン - 市場調査/ウェブサイト
4. Joan Frank - POWERwriting (ルイスエンドクラークリージョン)
ジョアン フランク - パワーライティング
5. Helen Wilson - Listening skills (ニュージーランドリージョン)
ヘレン ウィルソン - 聞き方のコツ
6. Val Harper - Ten Tips (ランドオーレイクスリージョン)
バル ハーパー - 教育資料: 10のヒント
7. Ruth Maltman - Let Your Finger Do the Talking (グレートブリテンリージョン)
ルース マルトマン - サイバークラブって何?
8. Janeen Vosper - CREATE Habits for Confident Living (オーストラリアンリージョン)
ジャニーンボスパー - 満足のいく生活習慣
9. Mary Wong - Marketing for Success (オーストラリアンリージョン)
メアリー ウォング - 成功する市場調査
10. Marlene Burns & Trudi Haug - Putting it all together (ヨーロッパ '92 リージョン)
マーリンバーンズとトゥルーディハウグ
- パワートークショートコース 課題6 実践的な話し方

11. Hisa Shibata - Fun with Kanji (日本リージョン)
柴田 ひさ - 漢字を楽しむ
12. Keigo Ishikawa - Just Say Know in J in J (日本リージョン)
石川 恵悟 - ジョークを通じた文化の違い (仮題)
13. Workshop by Trainers in Japan Region (日本リージョン)
日本リージョントレーナーによるワークショップ
- パワートークショートコース (仮題)



Plenary Sessions

プレナリーセッション (全体会合)

上記ワークショップの他に、2つの全体会合を計画しています。

1. Plenary Workshop - Evaluation by current International Board Members
国際役員全員によるワークショップ-評価
2. Plenary Speech - Speech by the former International President
元国際会長によるプレナリースピーチ-タイトル未定

登録申込方法 登録申込者=ワークショップ受講者

登録申込希望者は日本リージョンウェブサイト会員ページの左サイドのサイト「International Training Weekend」から申し込み用紙を取り出し、各自記入の上、各クラブでまとめてお申し込みください。6月30日でいったん締め切りましたが、引き続き9月30日(木)まで受け付けます。ワークショップ受講者は必ず昼食をお申し込みください。

受講方法

ワークショップ受講については、前もって申し込みを受け付けませんので、この会合に登録をされた方は、当日ご来場の上、ご自分が希望されるワークショップ会場に入り、随時受講してください。
ただし、参加希望者が、その会場の定員を超えた場合は、別のワークショップにご出席いただくようお願いすることになることを前もってご了解ください。

**使用言語と
通訳業務説明**

海外の会員によるワークショップは「英日両語」で受講できます。その方法は、専門通訳者に依頼するのではなく、また通訳機器を使用するのでもなく、英語を理解する会員のボランティアによって、・逐次通訳 ・サマリー配布 ・個人的ウイスピーング ・共同作業の場の質疑応答の援助などの方法を組み合わせて実行します。

国際会合に出席し、海外のワークショップを受講することは、めったにない、すばらしいチャンスです！多くの会員の皆さまが、ITC内外のご友人をお誘い合わせの上、是非ともご参加くださいますよう、神戸でお待ちしております！



年次大会で、「International Training Weekend 2010」の案内をする準備委員会の皆さん

羅針盤

「育む」 「Hagukumu」



ITC 日本リージョン次期会長 武内浩子さん

インタビュー 編集者 高木彬子

第28回 ITC 日本リージョン年次大会は大きな実りを残しながら無事に終了しました。各カウンスル、クラブの次期役員の方々は、第29期に向けて、活動方針・計画を練り始めておられることでしょう。その方向を定めるためにもと、一足早く次期日本リージョン会長にお考えを伺いました。

一次期会長として一年間リージョンにかかわって、感じられたことは？

役員会には毎月出席いたしました。次年度は会長の任に当たらなければいけないと思うと、いろいろと考えることができました。おかげでリージョンが見えてきたということは言えますね。次期会長、会長として2年間、リージョンにかかわるわけですが、やはり次期会長としての一年間は大切な1年でした。

リージョン大会の就任演説で、来期の会長テーマと活動方針の内容はとても心に残るものでした。会員がそのお考えを共有できるよう、再度お話しいただければと思います。

まず、会長テーマは「育む」と致しました。また育むという言葉には日本語独特のニュアンスがあるので、英語は日本語をそのままローマ字で表して「Hagukumu」としました。Mottainai、Tsunamiと日本語がそのまま国際語になっているご時勢ですから。

活動方針の1つ目は、PREM 委員会を浸透させていくことです。PREM 委員会を設置していないカウンスルが多いので、会員の皆さまには「PREM」という名前はなじみが薄いかもしれません。「Pは publicity 広報」「Rは recruitment 新会員獲得」「Eは extension 増設」「Mは membership 会員」です。この複合的な役割を持つ PREM 委員会をしっかりと機能させていきたいと思っております。また男性会員、仕事を持つ女性会員が増えていることはうれしいですね。

2つ目はプログラム委員会の充実です。このたびの年次大会で会則のプログラム委員会の項が修正されました。リージョン大会のプログラムを企画するだけでなく、PREM 委員会と連携して、また皆様のご意見を聞きながら、会員の教育に力を入れていくつもりです。例えば、リージョン主催の出前の勉強会とかね。

3つ目は現在、事務局の中に存在している翻訳部を常任委員会に入れたいと思っ

ています。ITCは国際組織です。翻訳部が無かったら何もできません。もっとも、会則修正ができるのは年次大会ですので、来期末のことにはなりますが…。

4つ目はメール通信のやり方についてです。現在はリージョンから一方的にメールが流れています。会員の思いや意見をリージョンに届けていただきたいと思います。双方向の通信ができるよう、今、その手段や方法を考えているところです。

5つ目は、リージョンはカウンスルと連携しながら、一年の活動に力を入れていきたいと思っています。

そして最後は事務局運営の見直しです。リージョン会計総予算の約30%が事務局運営に使われています。会員数が減少傾向にある今、見直していかなければと気を引き締めているところです。

—どのようなきっかけで、ITCに入会されたのですか。

今から約30年前になりますが、阪神クラブの会員で元リージョン会長のジーン・ジョイスさんとの出会いがきっかけでした。当時、ジョイスさんが開いておられた英語教室に私は通っておりました。ある時、ジョイスさんから、新しいクラブができるからと誘われたのです。それが甲南クラブです。結局私はチャーター会長を務めることになりました。その時、PTAの役員をしていましたので、テキパキと議事会議を進められる先輩たちを見て、憧れのような気持ちを持ったものです。

—ご自身はITCの魅力をごどのようにお考えでしょうか。

自分自身を磨くために勉強する組織です。前向きな考え方のできるすばらしい仲間が大勢おられます。また世界につながる国際的な組織であることも大きな特色でしょう。プロと呼ぶ指導者はいませんが、お互いを「評価」することで向上しようとしています。評価するために日ごろから物事をしっかりと見る習慣が身につきます。このような抽象的な表現でITCの魅力をつかんでいたのでしょうか？

—ITCが日本に入ってきて60年。会員の年齢層が幅広くなっていますね。

確かにそうですね。でも、これはITCの特長だと思っています。お役を通して、活動を通して、若い会員とベテランの会員がうまく交わることができますし、そのおかげで人間に幅ができて、クラブの成長にもつながっています。最近名古屋クラブの60周年記念例会に出席しましたが、ベテランの会員と若い会員がそれぞれに活躍しておられる様子に感動しました。

—最後に、リージョンの役割についてはどのようにお考えですか。

まず、国際との連携を充実させていくことです。ITCは国際的な組織なので、国際と相互理解をさらに深めながら、日本の文化も理解していただきたいと思います。現在、国際特別任命役員日本代表を務めておられる泉和子さんのように、国際で活躍できるリーダーを次々と送り出すこと。さらに国際の中でも最大のリージョンなので「国際に物を言える日本リージョン」でありたいと思います。

また、会員の皆さまに身近に感じていただけるリージョンを目指しています。そのためには会員の皆さまからのさまざまなご意見をしっかり受け止め、役員一同、精いっぱい努力してまいりたいと思っています。皆さまのご協力をこの誌面をお借りしてお願い申し上げます。

名古屋クラブ設立 60 周年を迎えて



名古屋クラブ 2009-2010 年度会長 西村みつ子

名古屋クラブは 2010 年 3 月 15 日、名古屋観光ホテルにおいて 60 周年記念祝賀会を開催しました。1949 年、ITC（当時の名称はトーストミストレスクラブ）の日本における第 1 号として設立され、チャーターナンバーは 273 という若さです。

名古屋クラブには 3 つの誇りがあります。

1. 名古屋クラブには 50 年会員が 2 人、40 年以上の会員が 6 人在籍しています。ITC の理念と基本を大切にという先輩会員の姿勢と、深い知識に学べる幸せは、名古屋クラブの第一の誇りです。
2. 名古屋クラブは新木昌子初代リージョン会長をはじめ 6 人のリージョン会長と国際役員 1 名を輩出しました。それは第二の誇りです。日本の ITC の基礎を固め、ITC の成長をリードされた先輩たちに続く会員である、ということを感じる時、名古屋クラブの会員は誇りと同時に後に続く者としての責任を感じます。
3. 名古屋クラブは若い会員が増えました。90 歳から 32 歳までの、年齢差と経験差を越えた穏やかで豊かな交わりとコミュニケーションは三つ目の誇りです。

祝賀会では 26 年前の第 2 回リージョン大会の折に作成された名古屋城のタペストリーをご披露しました。お城の石垣は当時の会員が公平に 1 枚ずつ布を持ち寄って会員の家に集まり、和気藹々と作られた苦心の作と聞いています。長い間行方知れずでしたが、60 周年直前に姿を現してくれました。名古屋クラブの豊かでさわやかな交わりの伝統を示すかのように、20 数年ぶりにいぶし銀に輝きました。

60 歳は還暦の年に当たります。暦を一回りして、名古屋クラブは再びスタートラインに立ちました。祝賀会で、会員は名札の上にキラキラ光る赤いリボンを付けました。還暦の赤いちゃんちゃんこの代わりという意味に加えて、オリンピックの聖火リレーの精神を表しました。時代に流されることなく、ITC の理念と精神を聖火の赤い炎のように受け継ぎ伝えていこうという決意の表れです。また心を新たにして、基本を大切に精進してまいりたいと存じます。

阪神クラブ設立 45 周年を迎えて



若い会員が演じる紙芝居



45 年在籍のお二人

ITC 阪神クラブ記念例会委員長 三宮晶子

カウンスル No. 2 阪神クラブは、45 年前の 1966 年 6 月、当時の米国総領事夫人 Daphne.S.Stegmaier により外国人 6 名、日本人 19 名でバイリンガルクラブとして発足いたしました。長年にわたりさまざまな国籍の会員と共に学び、お国の文化に接して自然に国際感覚を身に付けてまいりました。阪神クラブの一つの特色でしょうか。

毎年、会員宅で、赤や緑のクリスマスカラーでおめかしをし、ポットラックで行う 12 月のクリスマス例会は、米国総領事館で例会を開催していた頃から今も続く新旧の会員が親しく語り、交流を深める場となっています。

長い歴史の間に国際役員をはじめ、7 名のリージョン会長を送り出しました。

さて、45 周年のお祝いは 4 月 1 日、2 日と満開には少し早い桜の有馬で、1 泊の記念例会でした。祝宴は夕刻から謡曲「鶴亀」の祝言に始まり、若いメンバーが演じるプロ顔負けの紙芝居やクイズに興じました。2 日目の記念例会は第一部に式典、ビジネス、教育、第二部はグループワーク「探せ！キーワード」という 3 つのグループが競い合う斬新な企画のプログラムでした。この日を目標に全員参加で盛り上げた手作りの思い出に残る祝会となりました。

記念として、40 周年に倣い 22 名の会員の ITC でのデータと写真を記録した冊子「Members Data Book」を作成し、また、初代より今期までの歴代役員表を CD-R に記録しました。45 年もの歳月を重ねることができたのは、歴代の会長はじめ、役員会の努力とリーダーシップ、そして会員みんなの協力の賜物です。45 年のチャーターメンバーから 1 年に満たない新人まで、会員の在籍年数、年齢、経験そして個性も様々な組織の中でお互いの立場を尊重し大切にしながら共通の目標に向って常に ITC の基本に忠実に努力してきたと思います。これからも毎月の例会への出席が心待ちなクラブでありたいものです。

今期会長のテーマ「温故 前進」の如く、歴史を大切にしつつ、クラブの前進を願って、桜の有馬を後にしました。





菊池悦子様からの大切な贈りもの

泉 和子（阪神）

時には激しく、時には悲しく降りしきる雨の中、菊池様のご葬儀が神戸の教会で執り行われた5月7日は、奇しくも菊池様が40有余年チャーターメンバーとして在籍された阪神クラブの5月例会当日でした。重い悲しみの漂う会場で、会員は皆、声も無く、静かに頭を垂れてご冥福を祈りました。

ご健康がすぐれず、クラブを退かれ静かな療養生活に入られてから数年が経ちました。

いつ「和子さん！」と電話がかかるかと、そればかりを待ち望んでおりましたが、遂にあのお優しい声が届くことはありませんでした。

第3代日本リージョン会長として事務業務の統一や教育指導に力を入れられるなど、初期の日本リージョンの組織作りに大きな功績を残され、お身大きくもないお体の、また物静かなお人柄の、何処からあふれ出てくるのかと思うほどのパワーでもって発揮されたリーダーシップの手腕は、現代にも立派に通用する、お手本のようなものでした。

また、クラブのチャーターメンバーの方々と一緒に、いくつものクラブの増設に巧みな力を惜しみなく発揮され、次々と若い人をITCにお誘いになった、時のコミュニケーション技術の達人でもいらっしゃいました。

私も34年前「トーストミストレスという会を見に来ない？」と菊池様にお誘いを受けITCに出合った一人です。「この会はパンを焼く会なのですか？」という私の愚問に、ほほ笑みながら「組織の中に身を置き、経験を重ねながら自らを磨くところよ！」とお教えくださり、私を現在の会員にしてくださったのです。

阪神クラブのメンバーは、「菊池さん」とお呼びしないで「お母—チャマ」と親しみと尊敬を込めて話し掛けていました。そして「お母—チャマ」はどんな相談にも優しく丁寧に答えてくださいました。「お母—チャマ」の人を包み込むような温かなご人格をしかと胸に刻み、優しいお顔を臉に焼き付けて、私たちは生涯忘れることはないでしょう。

今こそ神様のおそばで、ご自身の信条であった「ほほえみ」をもって、お好きな花の世話を精を出され、そして一時も忘れず私たちを見守って下さっていることを信じて、ここに心からのご冥福をお祈りし、追悼の言葉といたします。

今期、岡崎リージョン会長の短期目標（本誌巻頭に記載）に沿って、活発な活動を推進しておられるカウンスルやクラブをご推薦くださいと、各カウンスル会長にお願いしたところ、さまざまな報告が届きました。今後の活動の参考になればと、ご紹介させていただきます。

オリエンテーションを終えて



カウンスル No.3PREM 委員会
主催のオリエンテーション

カウンスル No.3 PREM 委員長 國澤真紀子（淡路）

2009年12月3日、ポートピアホテルにて、申し込み者総数101名（内一般ゲスト25名）でオリエンテーションを開催しました。カウンスル No.3 の第1回 PREM 委員会で今期の活動方針を検討した結果、多くのゲストをお迎えするために、出席していただきやすいクリスマスのムード漂う季節を選びました。何事においても、質素に向きがちなこの時代に、敢えて予算を使って開催することには少しためらいがありました。しかし、長縄智恵子カウンスル会長が決断くださり、順調に事が運ぶことになりました。予算・財務委員長にオリエンテーションの目的を説明し、予算を組んでいただきました。4ヵ月という長い期間をかけて準備をし、しかも PREM 委員会にさまざまな分野のエキスパートがそろっていたという幸運もあり、無事にオリエンテーション開催にこぎつけることができたのです。

プログラムは2人の新入会員によるスピーチに加え、司会進行カウンスル ITC の概要説明・朗読・ストーリーテリング・クリスマスキャロルはすべて PREM 委員が行いました。そして10月に開催した「クラブ会員委員長とカウンスル PREM 委員の集い」で、元宝塚ジェヌの森岡怜子ポート神戸クラブ会員委員長による「お話とシャンソン」が急きょプログラムに加えられることに決まり、ゲスト数の増加につながったのではと思います。

さらに、同じく10月に開催した「第1回クラブ会長とカウンスル常任委員長会」においてオリエンテーションについて案内できる機会を得られたことが、その後、ゲストの呼びかけをお願いするにあたり、大きな理解と協力をいただけたのだと思います。「今期、試みたオリエンテーションは、ITC のほんの一部を知っていただくことにとどまったとしても、これを機会にゲストの皆さんに ITC との出会いを重ねていただきたい」と閉会の挨拶で述べさせていただきました。

カウンスル No.3 第29期は会員総数172名（内重複会員20名、重々複会員1名）でスタートし、6月20日現在、昨年8月以降の新入会員は13名になりました。もちろん、このオリエンテーションだけでなく、日ごろ、各クラブ会長、会員委員長をはじめ、会員の皆さんが例会へゲストのお誘いの積み重ねておられる地道な努力が会員増につながっていることはいまでもありません。こうしてクラブのご協力をいただけているからこそ、カウンスル No.3 の PREM 活動が順調にスタートし、成果を生みつつあることを心から感謝しております。

安芸クラブ再生の歩み

カウンスル No.4 安芸クラブ会長 青木和恵

1988年に29名でスタートしたカウンスル No.4 所属の安芸クラブでしたが、諸事情により会員が徐々に減り、6名の状況が長く続いていました。しかし、「ITCで学びたい」という6人の意志は固く、解散を考えたことはありませんでした。そしてついに3年前、カウンスルや重複会員の力を借りながら、「20人例会」を目標に掲げて再生の道を歩み始めました。現在、会員数21名。ここまでたどり着くことができた経過をご紹介します。

<再生への道>

2007年、日本リージョンのテーマ「刷新と再生」を受けて、当時のカウンスル No. 4 高木彬子会長および武田綾子第二副会長がPREM活動をスタートさせる。オープン例会を繰り返し、1年目に3人の新入会員を迎え、ひろしまクラブから重複会員5名が加わり、14名によるトライアングルクラブ（旧会員、重複会員、新入会員）の再出発である。2年目に1名入会。3年目の今期、6名の入会で第一目標としていた「20人例会」を実現することができた。

<再生できた一大ポイント>

6名のメンバーが「私たちはITCが大好きだから何としてでも続けたい」という強い意志を持ち続けていたことである。

再生の為のプログラム

1. 広報としてはクラブ例会に気軽に来ていただき、ありのままの例会を知ってもらうことを目的とし、チラシのフォームを作り、毎月簡単に差し替え継続して活用した。
2. 例会のプログラムに関して「こんな学び方もあったのか」と感じていただけるよう、ゲストと会員との距離感をなくすため、参加型のトレーニングを意図的に取り入れた。

再生のメモ

(私たちが貫いた5つの考え方)

- その1：目先の人集めでなく「**長期**」せめて3年先を頭において、前向きに生きる人をターゲットに見つけることから始めたこと。
- その2：何とか維持しようという気持ちではなく、「**革新**」ととらえたこと。
- その3：いろいろな考え方がある中で、あれもこれもと分散することを避け、一つのやり方に「**集中**」したこと。
- その4：意見を並べるのではなく、再生は会員増強という重要課題に全エネルギーを「**統合**」したこと。
- その5：最後は決めたことをやり遂げようとするねばり強さ、「**執念**」である。

千里クラブの PREM 活動

カウンスル No.5 千里クラブ第二副会長 高萩 薫

1. ハッピーフライデー

ハッピーフライデーは千里クラブにとって10年以上の歴史を持ち、なくてはならないが、ごく自然体で続けられている例会後の話し合いの場である。その日のうちに例会で話し切れなかったことを語り合い、大切な行事を控えての役員会の方針などを確認する場にもなる。「私、こんなに頑張ったんです」。興味津々の裏話に驚いたり、「〇〇さんよかったよ」と先輩に褒められてうれしかったり、感想や反省など本音で自分の思ったことを自由に発言する。もちろん、先輩からの指導や助言も入るが、みんなが発言するのでそれも素直にこれから気をつけようと思えるようだ。そして「今日の例会は良かった。楽しかった」と帰っていく。一人ひとりが千里クラブの一員としてより良い例会を作りあげていく要因となっている。



2. 広報活動（広報渉外委員会活動）

年2回広報誌 SENRI を発行している。楽しい行事や新人の紹介など、紙面を凝らして作り、会員のパソコンの腕を上げるのに役立っている。クラブのPR お誘いちらしを作成し、ゲストにお招きできそうな方に配布している。また、5年前からホームページを立ち上げクラブを紹介しこれを見て入会した会員もいる。

3. 新人と語ろう会と親睦会（会員委員会活動）

今期の会員委員会は入会5年未満会員を対象に、少しでも早くクラブになじんでもらうために役員を交えての楽しい食事会を計画した。また、年1～2回の親睦会を行っている。

春秋の行楽行事が多いが、今年1月は山本能楽堂「まっちゃんまサロン」を訪問。能楽の世界を体験し、2月には「万博梅まつり」に参加して貴重な茶室で食事とお茶をいただき梅園を散策、小雨にぬれた日本庭園のすばらしさを満喫しつつ親睦を深めることができた。



4. メンタリング

大切な新入会員のために半年間はメンターが付き添い、ビジネス、ITC用語などITCになじめるよう小まめに話し合う。

「魅力発信」して PREM 活動

カウンスルNo.6 京都クラブ会長 川島啓子

昨年、京都クラブは設立 30 年を迎えました。今期、私たちはこの 30 年の歴史を大切にしながら、今一度 ITC の存在と意義（魅力）について考える事にしました。その上で、ITC やクラブ、会員、それぞれの持っている魅力を大いに発信しようと、テーマを「魅力発信」と致しました。

10 月には ITC 創設月に因み「1 から学ぶ ITC」と題し、ITC とは何かを 1 から考えるプログラムを催しました。

内容は、新入会員自らが作成したパワーポイントを駆使して「ITC とは何か。その組織、何を学ぶのか」を質疑応答形式で解説し、次に先輩会員が「ITC の基礎理念」についてスピーチし、続いて「議事法は何故必要なのか、その運び方」についても質疑応答形式で説明した後、実際に「模擬審議」を行うというものでした。

このプログラムは当初、京都クラブの会員歴の浅い会員のために、ITC への素朴な質問の数々に明快に答えようと企画したのですが、結果は ITC を知らない方への良き案内となり、すべての会員にとって ITC の再認識と今後の PREM 活動に役立つものに仕上がりました。

しかも、このプログラムの準備の過程で、新入会員と先輩会員の双方に、更に深い信頼感と一体感が生まれたことは嬉しいことでした。

一般ゲスト 11 名を含む 38 名の参加者を迎え、自信と喜びを感じた例会でした。

クラブの HP では毎例会の教育内容を資料として随時掲載し、大いに「魅力発信」しています。現在 25 の資料が掲載され、今後もその数を増やしてまいります。10 月例会プログラムの資料の一部も掲載していますので、是非ご覧下さい。

3 月には同じカウンスルNo.6 の奈良若草クラブと合同例会を開催し「プロ&コン」のプログラムを楽しみました。少人数クラブと積極的に交流し、互いのクラブのありようと今後を探る良い例会になりました。

今期、京都クラブは 2 名の新入会員を迎え、喜びに満ちています。これも ITC そのものが持つ魅力と、クラブの真摯な取り組み、会員それぞれの「魅力発信」の賜物と実感しております。

「PREM 活動」－可能性を信じて－

カウンスルNo.7 鳥取クラブ第二副会長 長石啓子

私は2年前にも鳥取クラブの第二副会長を務めました。その期に会員の温かい協力により3名の新会員を迎えたうれしさは今も忘れることができません。

そして一年おいて今期も、また第二副会長を務めることとなりました。今期、当クラブは会員数27名でスタート。新会員もすっかりクラブの一員として活躍し、今や頼もしい存在です。クラブの結束力も高まり、バランスの取れたITC運営ができている現在、さらなる会員維持、増強につながる目標を立てることにしました。

折しも当クラブは来期創立30周年を迎えます。目標は「会員数30名」もちろん、会長も同じ思いです。とは言え、会員の協力なしではできるはずもなく、まずは前回の経験を生かし、例会には必ずゲストをお迎えしようと全会員に呼び掛けました。幸いにも魅力ある質の良い教育、プログラムが用意されています。足を運んでいただければきっと喜んでくださる。そう信じて、毎例会にゲストをお迎えしています。

例会当日は、全会員が笑顔でお迎えし、気持ちよく帰っていただけるよう、努力を惜しみません。もちろん、次回の出席を促すことも忘れません。まさに会員一人ひとりの態度、対応が「動く広告塔」となっているのです。

その結果、毎回、例会に数名のゲストを迎え、4月までにその数は40名近くになりました。そしてゲストの中から11月に2名、4月に2名の新会員を迎えることができたのです。

新しい仲間が増えることは組織に活力が生まれ、大きな力となります。振り返ってみると、今期当初に掲げた目標を達成できたのは、クラブ全会員の気力の充実とコミュニケーションの結集の賜物ですが、30年来クラブに培われている温かい雰囲気のおかげと思っています。

何はともあれ「PREM 活動」の原点は人と人とのつながりです。「人が動くところに新しい風が吹き、いい人間関係があるところに人が集まる」

これからも可能性を信じて、ITCの活動をしていきたいと思っています。

論語をよむ・美女たちへのオマージュ

カウンスル No.1 葵クラブ第一副会長 近藤みほ子

現在、葵クラブは17名と会員数が減少しており、役員を除けば実質プログラム参加人数はわずか10名。役割分担にも四苦八苦ですが、会員一致協力のもと、役員も総動員が当たり前の精神で、より良いプログラム作りを目指しています。

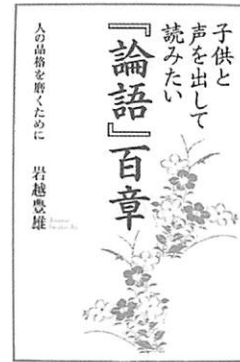
こうした状況の中、今期目標を「深く追求して学ぶ」とし、初めての試みとして年間を通して同じテーマに取り組むことにしました。その場限りになりがちなプログラムを毎月学ぶことによって、より充実させることが目的です。毎月の共通テーマとして選択したのは「論語をよむ」と「美女たちへのオマージュ」の二つです。

今『論語』がブームを呼んでいると言われていますが、しかし興味はあっても一人では取り組みにくいことも事実です。そこでこの不朽の名著をクラブで学んでみることにしました。多くの人たちを惹きつけてやまない不思議な魅力を皆で共感でき、さらには心の中でじっくり熟成させて、自分なりにその意味をつかみ、暮らしの中で生かすことができればと思っています。

まず9月はプロローグとして孔子と論語の研究、10月からは「子供と声を出して読みたい『論語』百章」を参照に、各月四章ずつ、担当者が気に入った言葉を選択、自分の感想を交えて解説を行い、全員で素読するという方法で取り組みます。そして最終月の7月にはエピローグとして、それまで選択された言葉全部をもう一度復唱し味わい、一年を通して何を学んだかを語り合います。

「美女たちへのオマージュ」では、毎月さまざまな形式により古今東西の女性たちの生き方を紹介します。例えばココシャネルへのオマージュでは、会員がココシャネルに扮してインタビュー形式により自らの人生を赤裸々に語り、オードリー・ヘップバーンでは、彼女の感動的な生き方をパネルディスカッションで検証し、五嶋みどりでは、彼女のストイックな生き方と素晴らしいバイオリンの音色をディスクジョッキー形式で紹介したりと、『論語』が難しいプログラムである部分、楽しく華やかなプログラムにしようと心掛けました。

『故を温ねて新しきを知れば、以って師と為す可し』『学んで時に之を習う、亦説しからずや』。葵クラブが常に「切磋琢磨しながらの楽しく心が躍る」学びの場であることを願っております。



ITC へまっしぐらの「ひがし広島クラブ」

レポート 編集委員会



クラブ新入会員最多賞を受賞
(左から2人目が大嶋会長)



ひがし広島クラブの歴代会長

誕生して4年目のカウンスル No. 4所属「ひがし広島クラブ」。「新しいクラブだが、きちんとした例会を行っている」と評価が高い。しかも今期、「クラブ新入会員最多賞」で表彰された。どのようにクラブ運営がなされているのか。歴代のクラブ会長（①平重映子 ②小林満利子 ③坂本公子 ④大嶋ヒトミ）に、ITCへの思いを語ってもらった。

―入会当初のITCの印象は？

「最初にITCのことを話してくださった女性が、エレガントですてきだった。少しでも近づきたいと、その方への憧れから」「模擬例会で挨拶をされた増設委員長のスピーチが素晴らしかった。短時間にあれほど多くの内容を盛り込んだスピーチができるようになるものならと」「儀礼的な会に思えて、自分が来る場ではないと尻込みをした」

―4年経った今、どのように感じていますか。

「確かに忙しくて大変だが、得るものも大きいと感じている」「本音で評価してもらえるので、その評価を踏まえてステップアップした新しい自分を発見できる」「何にも分からずしんどくて、何度もやめようと思ったが、立派なチャーター式典をやってくださった先輩たちのことを思うと…。踏ん張ってよかった」「何が楽しくてこんな会に入っているのと言っていた友人が、最近、自分も入ろうかなと言い出した。私が変わったのだと思う」「新しい出会いがたくさんある」「時間管理ができるようになった」。

―毎例会で大切にしていること、欠かさずやっていることは？

「準備に時間をかけ、評価を大切にしている」「役を頂いたら、まずプログラムリーダーに会い、プログラムの趣旨や目的を聞く。そしてITCの理念や4つの目的と照らし合わせながら、役割をどう遂行するか考える」「例会のすべての項目を入れた評価表を作成し、自分なりに評価してみる」

―5年目の節目を迎える来期の目標は？

「今期は16人のスタートだったので、例会運営が難しかった。来期は広報活動に力を入れ、30人を目指したい」「それもそうだが、まずは、今いる自分たちがそれぞれ充実すること。楽しく学んでいれば、周囲に自然に伝わるはずだから」「基本に忠実にやってきたつもりだが、ぶれた部分もあると思う。5年目は原点に立ち返りたい」

熱い話はまだまだ続き、真摯に学ぼうとする姿勢がまぶしく感じられた。

プレゼンテーションに挑戦



カウンスルNo.7 倉吉クラブ会長 明島智保子

会員数 32 名、クラブ歴 22 年、基本に沿った実践を重視しているクラブです。今期はクラブ会員の中からパワートークトレーナーが誕生したこともあり、クラブのパワートーク元年としてプログラム・教育計画を立て、プレゼンテーションに挑戦しました。

<目的と方法> 新しいスキルにチャレンジする。

1. パワートーク、パワーポイントを生かしたプレゼンテーションを例会で教育する。パワーポイントのできない人は、例会外で、グループで学び合う。
2. チームに分け、自由テーマで全員参加とし、発表の準備を十分にすること。

<実践の一例> 「いまどきホットなすぐれもの」というテーマのチームは、メンバーが思い思いのエコロジー暖房グッズのプレゼンテーションを行いました。

ほかのチームも「夢のバカンス」「音楽で豊かに」「ターシャの庭」のテーマから感じられるように、自由な発想とバラエティに富んだもので、出来映えは予想以上、32 色で鮮やかにプログラムを彩りました。

<会員の声> 「今回の目的は達せられたと思う。」

「2ヶ月間でパワーポイントの学習とプレゼンテーションの作成ができた」
「想像力がどんどん膨らんで、やればできるという達成感でいっぱいです」
「パワーポイントを使える会員が増えたことは、今後の活動において有益」
「劇場型プログラムにより楽しく交流しコミュニケーションが図れた」 etc.

「5秒で自分の意見を表現し、10秒で相手に強いインパクトを与える」というパワートークを学び、パワーポイント、プレゼンテーションに挑戦して達成できました。チームが学び合う場となって新たな扉を開き、会員一人ひとりがさらに輝かれたことは、クラブの大きな成長です。さらに挑戦してグループ力を高めたいと思います。

柏から発進！パワートークショートコース


カウンスル No. 8 サンデークラブ第二副会長 宮田誠一

2009年12月13日、この日は忘れない。初めて一般公開したパワートークショートコース、しかも日本語コースと英語コース並行の日曜午後6週にわたるセッションが終了した日だ。修了証が1人ずつ手渡されるとみんなから温かい拍手が起こる。そして Fellow of ITC で、主催者サンデークラブの小菅あけみ会長がコース終了を告げると一斉にトレーナーたちへの拍手に変わった。急いでアンケートを回収し目を通す。「楽しかった」「役に立った」「話し方に自信がついた」…等々賞賛と満足の声にほっとする。「分かりやすかった…」という何人かの答えを見たときは嬉しかった。トレーナーたちが最も苦心したのは、いかに分かり易く実施するかということだったからだ。

コースは11月1日に開講したが、トレーナーたちは既に9月に練習を始めていた。まだセッションの進め方も手探り状態、受講者数も不明の頃である。10月4日と11日に行った模擬練習は印象深い。実戦さながらの講義を行い、遠慮のない評価が火花を散らした。特に日本語コースはパワーポイントの表現が日本語として分かりやすいかどうか厳しいチェックを行い、あいまいな用語や表現があるとすぐに協議し分かりやすい言葉に変えていった。


トレーナーたちは“地元最初のショートコースを必ず成功させよう”という熱い想いに満ちていた。暗中模索しながら、このイベントを着実に進行させ、成功に導いたのはこのトレーナーたちのスピリットだったと私は確信する。

受講者は日本語コース11名（8名は非会員）、英語コース12名（7名は非会員）で職種も大学生・看護師・出版会社員・大学教授・国際交流ボランティア・主婦、そして国籍は日本・中国・韓国・フランスと、バラエティに富んでいた。これを見るとショートコースへの潜在需要は十分あると推測できる。受講者からのITC入会者はまだ1名であるがコース終了時に約束していた同窓会を3月28日に実施した。日本語コースから2名、英語コースから4名が集まり、三分間スピーチを交えた楽しい会となった。そして3ヵ月後に1時間のバイリンガル模擬例会を行うことを約束したのである。この輪を大切に守り拡大していきたい。なお広報活動では地元の柏市の広報や民間の生活情報誌への広告（無料）が非常に効果的だった。また常に会場で支援をしてくれたITCの柏クラブと東葛クラブに感謝する。クラブ間の連帯が強化されたこともこのイベントの大きな成果である。



人前でうまく話せたら……

プレゼンテーションワークショップ



…一緒に練習してみませんか！

パワートークインターナショナルは、
上手な話し方やリーダーシップのトレーニングを行う世界的な組織です。
職場で、学校で、PTAで、ボランティアの会で、目に見える効果がでています。

6回コースの「パワートークショートコース」に参加しませんか？

場所：柏市民活動センター 04-7163-1143（柏駅東口徒歩3分）

日程：11/1～12/13 毎々曜日（11/15を除いた6回）

時間：日本語コース 午後1:15～2:45 英語コース 午後3:15～4:45

費用：各コース3,000円 + テキスト代1,000円程度

主催：ITC パワートーク サンデークラブ

パワートークインターナショナル www.powertalkinternational.com (英語)
日本リージョン <http://www.itc.jp/> (日本語)
INTERNATIONAL TOASTMISTRESS CLUBS SINCE 1935

申込み・問合せ先：宮田 04-7132-8935

E-mail: seiichi.miyata@tbc.t.com.ne.jp

特別寄稿



《対話を忘れた日本人》 講演要旨

講師 岡部達昭

現 日本語センター専門委員、エグゼクティブアナウンサー

元 NHK アナウンサー

桜の花のピンクの秘密

京都は今、美しい桜の季節です。この季節になりますと、いつも詩人の大岡信さんの「言葉の力」というすてきなエッセイを思い出します。大岡さんが京都の嵯峨にある染織家の志村ふくみさんの工房を訪ねた時のことです。桜色に染め上げた美しい着物がありました。そのピンクは淡いようでいて、燃えるような強さを内に秘め、華やかでいて落ち着いた色でした。「この色は何から取り出すのですか?」「桜からです」。その答えを聞いて大岡さんは、あゝ桜の花びらを煮詰めて取り出すのだなと思ったそうです。ところが桜の樹皮を煮詰めて出すと聞いて、あの黒いごつごつした樹皮からこの色が出る、大岡さんにはわかには信じられませんでした。桜は花を散らしたあと、翌年に咲かせるためのピンクを、葉、枝、幹、根と、木全体の営みの中で作り始める、そして花を咲かせる少し前に一斉に樹皮に集めるのです。

大岡さんはめくるめくような感動を覚えました。桜の花びら一枚一枚は、私たちが話す言葉の一つ一つと同じではないか。それだけが単独に存在するのではなく、木全体が作りだすように、私たちの話す言葉の一つ一つも、全人格や生き方の中から生まれるのだ。大岡さんは、この話を「言葉の力」というエッセーにまとめました。

究極のコミュニケーション能力

コンピュータ万能の今の時代は、マニュアルで言葉を覚え、電子文字で情報を伝え合っています。情報とは情を報せると書くように、そこには内容と心があります。ところが今のICT

(Information and Communication Technology) 社会では、その心(情)が極めて希薄になっています。心を伝え、心を読み取るコミュニケーション力が急速に低下しているのです。

昨年の6月、日本の宇宙飛行士の選考試験をNHKテレビが追っていました。高度な運動能力、知力、語学力、専門知識、肉体の健康度など、8ヵ月かけた厳しいテストを経て、最終審査に残った10人が、63㎡のマンションで1週間の共同生活に入ります。各室にカメラとマイクが仕掛けられ、すべての行動、言動を記録します。その最終審査のポイントは2つ。

- ①確かな自分の意見を持って、主張できるか。
- ②他を思いやることができるか。

そして大西さん、油井さんの2人が選ばれました。狭い宇宙基地の中で、言葉も文化も違う人間が数ヵ月を共にするわけですから、この2つのことは欠くことのできない究極のコミュニケーション能力でしょう。そしてそれは社会生活を営む上で、私たちすべてが身に付けなければいけない能力でもあるのです。

気持ちを込めた対話を

スイスの生物学者、M・スワンソンが、「人間が生きていく上で欠くことができない物理的要素が4つある。水、空気、食糧、そしてコミュニケーションだ」と言っています。

コミュニケーション能力とは何でしょうか。一言で言えば、私は「人を喜ばせることができる能力」だと思っています。ところが今の時代は、挨拶ができない、お礼を言わない、お詫びができない、そういう人間が満ち溢れています。基本的なことが劣化しているのです。

挨拶とは、相手の顔を見て、「〇〇さんこんにちは」と名前を呼び掛けてするのです。また本当に伝わるお礼は、ただ「ありがとうございます」ではなく、何がどうありがたかったのかを、具体的に伝えるのがお礼です。そして次に会った時にもう一度、「先日は本当にごちそうさまでした。あの味、忘れられません」と言います。「ありがとう」は二度言うことで、心が伝わります。

お詫びも、心のこもらないマニュアルお詫びが蔓延していますね。書かれた文字を表情も無く読み上げて、ただ深々と頭を下げるだけです。これもコミュニケーション能力の不足です。気持ちを込めた対話をしていないのです。

対話を増やそう

昔、私たちの先祖は、火を囲んで一家団欒の時を持っていました。そして、つい数十年前の昭和の後半には、テレビを前にして家族が集まり、対話を楽しんでいました。平成の今、テレビも電話もパソコンも、一家に1台から一人1台の時代になり、家族の団欒も対話も激減しました。その結果、子どもたちの言語力が貧しくなってきたのです。

小学生が職員室に来て「紙」と言います。「なんの紙だ?」「わら半紙」「何に使うのか」「アンケート」「何?」「文化祭の演じ物を決める」「何枚いる?」「40枚」、「なんでそれをまとめて言えないのだ!『文化祭の演じ物を何にするかのアンケートを取りたいので、わら半紙を40枚ください』と言えば済むことだろう」。こうした、単語でしか言えない子どもたちには、質問して質問して、文にしてセンテンスで話す力を付けてやるのが大人の役目でしょう。

しかし、その大人たちにも、まとまった言語を話せない症状がじわじわと表れています。会社で一日中パソコンに向き合い、人と対話することが少なくなったため、自分の考えや気持ちをまとめて人に伝える力が急速に衰えているのです。企業はやむなくさまざまな研修を行い、弱体化した部分の強化を図ろうとしています。しかし、それ以前に、日常の業務の中でもっと

対話する機会を増やすことが先でしょう。

聞き方 5つのNG

対話とは、話すと聞くという行為によって行われます。対話力の衰えとは聞く力の衰えでもあります。人の話は、聞いているようでも実際にはほとんど聞いてはいません。よい聞き方とは、相手が話をしやすいように聞くことです。

反対に悪い聞き方とはどんな聞き方でしょうか。「5つのNG」にまとめました。

- ①話し手の顔も見ないで何かをしながら聞く。
- ②相づちやうなずきが素っ気ない。
- ③途中で話を奪って自分の話をする。
- ④すぐに結論付けて終わらせようとする。
- ⑤話を最後まで聞かずに意見や感想を言う。

終わりに

私の生き方を変えてくれたすてきな相づちの話をしましょう。

日本語センターにO君という4年後輩のアナウンサーがいました。彼に話をすると、しっかり顔を見て、「おっしゃるとおりですね」という相づちを頻繁に打つのです。とても話しやすいのです。

ところが私の話にはひと区切りがつくと彼は自分の意見を言い始めます。ちっとも「おっしゃる通り」ではないのです。つまり、「岡部さんの意見はおっしゃる通りです」と私の意見は正論として認めた上で、彼の反対意見を述べるのです。こうしますと、お互いに気持ちよく話し合い、妥協点を探ることができます。

彼に出会ってから、私の人生観が変わりました。言い張らなくなりました。人はそれぞれがそれぞれの正解を持っている。それは違って当たり前なのだ。つまり正解は一つではないということに、60歳を過ぎてようやく気付いたのです。それ以来、とても楽になりました。

「おっしゃる通りです」は、コミュニケーションにおける最高の相づちです。

(ITC 平安クラブ 30周年記念講演より)

未来を切り開くヒントを探る

会員の価値観、願望というものは、時代とともに変化しています。組織がその変化に対応するということは、共通の目標を目指しながら、やり方は革新の連続のように思います。

第3号は、第28期会長が目標とされた「PREM活動の促進とプログラム・教育の充実」の実践のようすから、今後のヒントとしていただければと焦点を絞りました。また、今期の年次大会の教育セッション「事実の中からチャンスを見出す」の中の「ITCの問題解決について考える」という内容は、組織の成長のために次期につなげてほしい優先事項かと、意図的に頁を割きました。

会員の皆さまの温かいお励ましの言葉をしっかりと心に刻み、感謝してお役を終わらせていただきます。

第28期編集者：高木彬子（ひろしま・安芸）

スタッフ：石崎慶子（ひろしま・安芸）

沖田道子（ひろしま）

米門公子（福山）

変更と訂正

第28期リージョン会報第2号14ページに誤りがありましたので、訂正させていただきます。

高山敦子会員（淡路・北摂・イースト神戸）



高山敦子会員（淡路・北摂・クリスタル神戸）

Japan Region **3**

ITC 日本リージョン会報
Vol.28 / No.3

編集・発行：第 28 期 ITC 日本リージョン
印刷：(株) 広島デザインセンター

ITC Pledge

ITC宣誓

We, as members of International Training in Communication, hereby pledge to improve our communication and leadership skills, in order to achieve greater understanding throughout the world.

我々インターナショナル トレーニング イン コミュニケーションのメンバーは、世界中の相互理解促進のために、コミュニケーション技術と指導力の向上に努めることをここに誓います。

2009-2010

ITC日本リージョン声明文

Mission Statement of Japan Region

ITC日本リージョンの使命は、ITCの目的とするコミュニケーション技術と組織運営の技術を習得する機会を会員に提供してリーダーシップをそなえた社会人を養成し社会に貢献することにある。

The mission of ITC Japan Region is to present the members opportunities for quality training in communication and leadership skills which are the purposes of International Training in Communication and benefit the society by providing mature individuals.